

高 島 高

詩 集

北 方 の 詩



刊 行

ボ ン 書 店

序

序に代えて

萩原朔太郎

高島君の事を考えると、僕はいつも鴉かすのような詩人的風貌を連想する。その鴉は、今この詩集の中で、北国の暗い森や、氷の張りつめた平原や、白く雪に光る山脈の上を飛びながら、ニヒリストの哀切な悲歌を歌っているのだ。しかし僕はこの詩人が、いつかその圧された意志の翼で、吹雪に向って叫びながら、一層の高い上空を飛び躍し尽して、もつと太陽に近い国々の方へ、渡り鳥のように移住する日のあることを考えている。君の本当の文学は、おそらくそれから後に来るであろう。

北川冬彦

高島高の詩は、その風貌そっくりかいいいに魁偉かいいいなものである。まるで蔵王山の雪人形のように不気味だが、しかし、あれの姿態の示すがごときメルヘンとリリック*とを孕はらんでいる。

この作者を、新詩壇には稀れに見る男性的詩人だと、私は敢あえて云う。

*叙情的の意

目次

北方の詩	一〇
北方の春	一二
北方の秋	一六
北方の冬	一八
北の貌	二〇
力	二三
意慾	二四
海	二六
胸	二八
埋	二九
火	二九
譜	三〇
泉	三二
荒野	三三
北海	三四
黒潮	三五
母	三六
影	三七
風	三八

北方の詩

亜寒帯の唄	四〇	冬の北海回想	五九
冬景色	四二	波止場	
北方的風景	四四	雪	
同じく		冬の海	
同じく		寒流	
雪山の思い出	四八	暗い日に	六二
岩氷		化石	
雪崩		墓	六五
吹雪		村の中	六六
迎春	五一	窓	
松		噴水	六八
雪二題	五四	野景	七〇
或は		模様	七二
早春	五六	雨模様の街	七三

山脈を馳^かけてゆく白馬のむれがある

空は虹のパンセ^{*}を孕^{はら}んでか

*思考、思想の意

朝あけは雲など呼んで

いま山麓の雪を踏む牛群

草は見えない

この冷却の皮膚^{ひふ}下に

草は生きている

このひろびろとした高原は生きている

ほのおするものは——氷だ

はりつめてこわれそいな

北方の春

氷のようにはりつめたおもいを掻き流してゆく

白銀のように背を光らせながら遠く山脈から走ってくるのだ

あの空のむこう雪など燃やしている原始の水源から

すこうしずつすこうしずつしのび寄っていた

このあたりいぶきは**迸り**

大地を貫いて突きすすむ若芽　若芽の火

噴きいでる意欲のように

目覚めかけた地層一帯が**火焰**のように燃え上る

友よ

地層にちつてはかよってくるこの風をきかないか

ちつては耳朶じだにさえほてつてくる風

ときには南方のかおりさえ孕はらんで

日々にたわむれては空の憂うさをとき晴らしてゆく

もつれたおもいの糸をとくように

とけるように晴れてゆく

地層ひだの襞　襞ひだの地層

水はところかまわずかけめぐるのである

北方の秋

1 山脈は日ましに濃紺のうこんの皮膚はだえに白臘色はくろうの剣光の冴さえを加えてゆく。
暗紫色の空。そして終日灰白の雲等は千切れとぶ飛ぶ。

2 今日の野分のわけは荒れ来るだろうか。野を、林を、畔道あぜを、そして垣根をその吹くままに吹くために。はるか山麓の村から。遠い山脈のむこうから。傷。それは古い傷痕きずあとの痛みのように野分は……。

3 突然。銃声がパーンとあたりの静寂を破る。かなたの林の中からおどろき飛び立つ鳥群。あれは渡りおくれた小鳥らの群れでもあらうか。勝ち誇ったようにけたたましく二こえ三こえ犬が吠える。

4 近くの畔道には赤い柿の実が一つ。残されて、いつまでも広野こうやの秋にみとれている。

北方の冬

1 枯木をめぐる風は日に日に捨て残された落葉等をさらに蝕むしばんで
ゆくのであった。其処そこの陰影にある水溜りについて幾たびも暗い雲
等は何か噂うわさし合っては流れていった。浸潤しんじゆんされた地層よ、

2 落葉の色にしみた地層の腐敗物質ふはいぶつについて枯枝の上で終日小鳥は
考えこんでいるのであろうか。ときには盲めしいた風がその棕毛むくげをさえ
きびしく吹きながっていったのだったが。

3 小鳥はもう飛べないのかもしれない

4 思い出してからもう十日。はるか剣氷けんひょうの刃をかすめて冬ごとに幾
年も幾年も私は待っている人のことを。

5 鉛色に截断さいだんされた風景を截断する水溜りの上の枯枝の上で小鳥は
終日考えこんでいた。

北の貌

— 親不知附近の未明

1 飢えている海のむこうは暗く壁画のように押黙ったまま不安げな眉を寄せ合っている。冷えた灰。灰の屍。白い歯等は組み合いつ噛み合いつ碎けに碎けちるであろう。

2 皮膚病の海は皮膚病の治療に近き落屑期の粗面がむずかゆいのであろうか。絶え間なく落屑の上には落屑が積み重ねられてゆく……

3 沈んだ瘡園。死面。手……

4 死面の歯列は階調の宿命ゆえに絶え間なき笑いを粗雑な死面に与えねばならぬのだろうか。粗雑な笑いはときには皮膚病の海を角度のむこうで吠えさせる。靄のむこうで。怪獣のように、怪獣のように。白く白く銀蛇はのがれにのがれてゆく……

5 遂に銀蛇は眠りこけている巖等に挑みゆくのであろうか。挑まれれば巖等は獣類のように眼を怒らせる。

6

獣類の眼に明るむ灰色。皺を抱く海。海を抱く皺。うずまげばう
ずまいたまま漂白されゆく皺等は次第に漂白されゆく皺等の上にひ
ろがりゆく……

7

夜明けよ、夜明けよ、

力

肉体をつらぬく焔がある

この焔をこめて燃え上った生命があるというのだ

ぶつかれ！

意 慾

そのまま鉄等となって組み合っている骨格

蒼白そうはくな皮膚にも血の燃え上ることがあるという

生をつらぬくものは北へ吹く風ばかり

風をつらぬけばこの焰

さかり

骨格のめぐりに黒い輪影りんえいとなって燃えた

海

焔する面輪おもわを音もなく通りすぎてゆく風がある

灰色のパンセは其処そこに原始の火と化す空であるか

遥かなる想いを捨てて

魂ぎようしの凝視を凝視するならば海は暗みゆくのだ

火のついた衣裳いしやうのまままで 火のついた衣裳いしやうのまままで

生と生とをめぐりめぐる

日の軋きしみの輪影りんえいを、滅びゆくその最後のものを

その境界かいぎやうの方向について

いま鬱々うつとして歴史の手は

しずかにしずかにかざしみられるのである

胸

そこに夕映えをおもい、たぎる血の紅さ

つらぬけよ焔北風すさぶ闇

手をふるれば久遠の流れのとどろき

みよいまもなお原始の虹、雲とたわむる

埋火

埋めてさえおけば

いつまでもいつまでもある炭火を

あなたが灰をとったため

ばあつと燃えてそして

こんなに早く消えてしまった

楽譜

—— ツイゴイネル・ワイゼンに寄す

闇^{やみ}から生れ

闇の世界へと吹きすぎぶ風である

闇の世界にひそむ

闇の肉体の息吹^{いぶ}きのために

風は焰^{ほのお}のように燃えさかるのであろうか

火花のように忽然^{こっぜん}と狂い

火花のように忽然と消えてゆく

火花のように忽然と狂い

やがて盲^{めし}いた風が死んでしまう

泉

そこに緑の魔等の憩いがあるとおもえ

そこに汗ばみたる時間の鬱積があるとおもえ

洩れ来たれるひとすじの光

光 苔等の上をすべり

石体の窩みに絶え間なきつずまきとなつてうつされるのである

荒野

まるで黒い鳥みたいなものがそこら一面野原を馳けめぐっているの
である

とおくはるか山脈のむこうにだつて馳けてゆく……

黒い鳥の嘴は真赤な色であろう

野火のような風が畔道伝いにどこまでもどこまでも追いかけていつ
た

北海

あの雲の背の上では太陽が輝いているとは誰れも思うまい

太陽が輝いているのだが見えないだけだと誰も思うまい

ただ雲だけあるのだと思うだろう

天いっぱいをかけめぐりかけめぐり

いまにも墜ちるかと思られる一面の雲

黒潮

みよ不安が空から襲ってくる

幾百頭の龍神の群れか

雲だ 雲だ

風雨を孕んで空一面

母

母は
傷みやぶれた手風琴です

影

かなしみが
こころの底にうずくまるとき
僕はじっと
白い手を見つめる

風

小雀こすずめを追いかける鷹たか

その眼まなこの鋭く

光をうけて舞い上り

舞い下り

鷹は襲ってくる 爪

速度はわからない

亜寒帯の唄

1 重く垂れ下っている鉛の空の下に限りなくひろげられてゆく氷原
である。空は枯枝につきさされながらも、もうそうしているし
かたがないのだ。

2 もう鳥の行方が見えなくなってしまったあとで、ひとしきりまた
風があれた。風は鳥をも凍死させてしまったのかもしれない。

3 あの山脈の背のあたり、鉛は冴えたかがやきをもっている

4 皮膚に穿つ針。針のきらめき。もう氷原に生きているものはあの
枯木らばかりなのだというのか。風は空を吹き、山脈を吹き、氷原
の枯木をさえも吹きなぐる、

5 いまに、雪がふるだろう

冬景色

そこではとところどころで真っ裸となつてふるえて立っている木らで
ある

白い雪のあつまりはたくさんかおの貌のあつまりのようだ

木の根は雪の上のことについては知るまい

雲のことについてはなお知るまい

しかし知ってみたくともあの雲らは木の根のことについてはなおさ
らわかるはずもない

北方的風景

巨大な広き胸を

鋭くかすめさる氷の夕映えがある

美しき剣舞は

きらめく剣光のまぶしきであらう

此処で、

黒きものよ

名をななれ

氷の風よ 風の氷よ

焔ほのおの行方はもう

山脈一面の鏡をつらぬきつらぬくのだ

同じく

風にかざすのは冬の木立であろう

それは白き冬の木立であろう

名もなき鳥よ

失いたる靈魂れいこんよ

生れたる新しき原始よ、雪よ、

同じく

樹氷つららは星つららであろう

星は樹氷つららであろう

雪山の思い出

——あるいはパツハのトッカータとフーガへの一幻想

岩 氷

うずまき型にうずまいて

灰白色をかすめさるひだひだ襞々である

いろいろな形でうずくまる

押し合いそして重なり合い

それらが空をかぎっている

雪 崩

何喰くむぬ太陽が

ボンヤリ照っている

吹雪

目をたたたく

唇までたたたく

そしてゆき過ぎる

迎春

風に叫ぶもの

ぶつかり

巖^{いわお}に碎ける波

雪に叫ぶもの

血の躍^{おど}り

初日の出をおがむ

松

雪空や

朝日の軋きみ重く

いまだ凍結するあたり

影鮮あざかに

風放ち

不死身の生命いのちの腰を据すえ

雪 二 題

竹はそれまでだと思っ
ているだろう

掌なごみの上うへのの小法師こぼうしよ

影はいつまでも帰え
つて来ず

竹はぐんぐん重くな
る

或あるい は

雀すずめはな
いていないで

太古に似た夢は雀の胸の
あたりを掠なすめる

だから電柱はボンヤリ立
っているので

杭くいに似
ていた

早春

きれぎれにみだれ飛ぶ白雲

柵さくにもたれてじつとみつめている

草を喰はんではものうげに見上げる

まだら牛等の瞳ひとみ

網膜もうまくには雪解けの山々がものかなしいのであろうか

牛等はだまり合い

くろ土の湿りを踏んでいる

いつの日きえてゆくおもいであらうか

いつの日とけてゆくうれいであらうか

めまぐるしくながれる生活の日々

たとえばほてる血潮のように

それはせきこむ流れのように

ただあてどなくかき狂い押しながされてゆく日々だ

冬の北海道

波止場

鷗かもめらはときに波とまぎれた

雪模様の雲の重みに

錨いかりはまかれる

雪

半島をかすめて風はあれた

冬の海

一片の銀をかすめれば

銀ははるかのかなたへ消えてしまう

既になくなってしまった汽船ふね

太陽は見えない

寒流

水藻みずもは海を走るそうだ

汽船ふねは多分北を指している

暗い日に

僕は海に来て考える

絶え間なき波頭はとうと世界へのつづきを

僕は海に来て考える

うしなわれてゆく世界と埋れた貝殻かいがらのことを

さよう今日の空は僕には低くすぎて

北方へ流れる雲行くもゆきは

何んだか生涯に似たような

化石

瞑つむれる目や

色のない風のごと

世紀世紀が通りすぎる

砂に埋れて見る景色

天の極みに松一本

墓

色褪めた葉裏を音もなく通りすぎてゆく風がある

ひびきもなく空のかなたへ消えていった跡があるという

この焔をこめて餅は石にさえ消えていったというのだ

ああ 死のように色のない風である

村の中

鴉はどこへかえるのだろう

時間はもはや休止したと思われる

いくつもの泥濘をふみこえて流れる雲

風が倒れる。北の方へ

ほのあかりのちらつく森の方へ

暗くぬりこめられた山脈の方へ

祈りはしばらくいのられた

窓

森の中の一軒だけは一晚中眠らなかった

噴水

銀盤にしぶきが霧を噴^ふいている

絶え間なく松葉は松葉の上に影をゆすぶっている

水のある方へ

月はうかがっているのであろうか

耳をすますと

月がうたっているような水音である

野景

雲色にふくらんだ皮膚ひふをうねらせて
ゆく川である

冴さえすまされた鏡となつて凝視ぎょうしする
雲をうつす瞳である

風は雲色に吹き、いいしれぬ郷愁を
吹きおくる彼方

雲は流されゆくのであろうか

草等に消えゆくのであろうか

みわたせば星うすき空である

空まで走る川である

模様

霧雨きりさめの中にあなたがいる

泣いて立っている

ガラス鉢の中の

金魚のように

雨模様の街

僅かに吐息をしのばせて街並を白くうつしている灯ひである

熱っぽい病気のように風は皮膚ひふからにじむようだ

見えぬ熱帯の空に音楽なんかの音がするようで

その方向について私はいま一度其処そこの街角をふりかえる

あとがき

これは事実上僕の第一詩集である。詩作十年。拙い僕にも波乱曲折があつた。しかし、一つの信念は中でもいつも変わらず抱いていたと信ずるのである。それは理屈でない理屈である。主義でない主義である。そしていま、僕はその信念のいくらかを實現し得たと思ふ。しかし、それはほんのわずかには過ぎないが、もつと大きな具体性へのための入口だけは見つけることが出来たと考へるのである。即ちこれらの集めた詩はそれである。だからこれらの詩は、來たるべき僕の詩への一つのデッサンとも考へることが出来よう。いま一つの皮を脱いだ僕と、僕の血熱き青春の日の文学的記録のいくらかを、多少でも理解していただけたら幸いと考へる次第である。

終りに、この貧書にもかかわらず刊行前より絶大な支持をいただいた知友諸賢に深く感謝の意を表します。

昭和十三年二月二十三日夜

高 島 高 識

昭和十三年七月一日発兌・昭和十三年六月二十日印刷
著者高島高・刊行者鳥羽茂・印刷所東京市豊島区長
崎東町二ノ六九六虹霓社・刊行所東京市豊島区長崎東
町二ノ六九六振替東京五九〇七八番ボン書店・価一円

ISBN978-4-905345-49-7

◎本書は原詩集の字組・字体に可能な限り近づけてあるが、一部の旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。また、難読の語句には振り仮名、難意の語句や著者特有の表現には*印を付し、小文字で注釈を下部に入れた。いずれも、少しでも読者の便を図ろうとしたもので、原詩集の雰囲気はいくらか損じることについてはご寛恕いただきたい。

詩が光を生むのだ 高島高 詩集全集

第一卷「北方の詩」

二〇一三年一〇月一五日

一（四巻十別冊（分売不可））

定価 四〇〇〇円十税（セット価）

著者 高島高

発行 高嶋修太郎

〒九三六―〇〇六八 滑川市加島町八六六

発売 桂書房

〒九三〇―〇一〇三 富山市北代三六八三二一

電話 〇七六―四三四―四六〇〇

FAX 〇七六―四三四―四六一七

印刷 株式会社 すがの印刷